

# 会話意識尺度作成の試み

斎藤 和志

## I. 背景と経緯

本稿は、2001年度文学部コミュニケーション学科の授業として開講された「尺度構成法」という授業において実施した調査の報告である。この授業では、テーマを設定し、それに関わる個人差や態度を測定する尺度を実際に作り上げる手順と方法の概略を学ぶことが目的となっている。2000年度、2001年度と、会話に対する感受性、またはコミュニケーションに対する意識といったテーマを掲げてきた。本来は測定すべき概念の明確化が重要であるが、この2年間で取り上げたものは、日常生活の中でみられたある出来事に端を発した、非常に素朴な疑問から出発している。したがって、その心理学的な意味、構成概念としての定義には非常に問題が多く、探索的な研究となっている(授業としての側面からいえば、分析方法にやや重点が置かれ、概念の検討やステートメントの作成の手順は不十分なものであろう)。

会話やコミュニケーションに関する個人差研究は、多くの場合対人場面での不安要因や回避行動に焦点をあてている。坂本・プリプル・キートン(1998)は、コミュニケーション回避を説明する構成概念として、レティセンス(reticence)、シャイネス(shyness)、コミュニケーション不安(communication apprehension)の3つを代表的なものとしている。また、コミュニケーション回避に関わる他の諸概念として、対人不安、聴衆不安、スピーチ不安をあげている。コミュニケーションの現実的な問題を考える際に、こうした不安傾向に焦点をあてるのは、その行動傾向自体の改善と、それらと関連して派生すると考えられる不適応を予防するという効果を考えると非常に有意義なことだと考えられる。

しかしながら、ここではそうしたコミュニケーションのネガティブな側面にのみ焦点をあてるのではなく、会話という事態に対してより積極的な関心を示す個人差に注目したい。会話という事態をどのように意識するか、会話事態に対する関心や感受性の程度に関する個人差である。この発想は、斎藤・中村(1987)や斎藤(1991)の対人的志向性、斎藤(1999)や吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折(1999)の社会考慮と共通したものがあある。対人的志向性は、他者に関する関心や反応性に関する概念であり、対人的志向性が低い人は対人場面においても個人主義的で合理的な考え方に立脚する傾向がある。それに対し

---

\*本論文をまとめるにあたって、「尺度構成法」の共同担当者である石田靖彦先生(愛知教育大学)から承諾を得ている。また、平成12年度、平成13年度の「尺度構成法」受講生、調査に協力していただいた本学坂田陽子先生と学生の皆さんに記して感謝の意を表します。

て、对人的志向性が高い場合は、協力や競争といったバラエティのある対人行動をとることになる。また、社会考慮とは、私たちが住む社会というものを考えようとするかどうかという態度であり、社会考慮が低い場合は個人的な観点から社会というものを捉えることになる。それに対して、社会考慮が高い場合は、バラエティのある社会認識が構成されると考えられる。つまり、ある種の傾向性が低い場合には他者や社会との相互依存関係を考慮しないのに対して、他者や社会を意識した場合に、さまざまな行動や認知のバリエーションが生じるという考え方である。

会話に対する意識も同様であり、会話意識が低い人は、会話という事態に相互依存的な要素をみつけにくいという傾向を示すと考えられる。逆に、会話意識の高い人は、会話事態からさまざまな情報を引き出す傾向がみられる。冒頭に述べたある日常生活の中の出来事を例にあげて考えてみよう。それは、携帯電話を使用した会話事態で起きたことである。通常、携帯電話を対面で使用することはない。当然、遠方や居所が不明な相手と会話することが前提となっている。しかし、対面状況で携帯電話を使用すると、音声が遅れて届いていることが分かるであろう。こうした音声の遅延は、技術の進歩により感じることはない、または通常のコミュニケーションとして不快でない程度までに改善されている。こうした携帯電話の音声遅延に関して、ある人はまったく気づかず、実際に体験して初めて遅延を知る。また、遅延としては認識していないのだが、「相手が思慮深く考えて話をしている」とか「慎重に話すような周囲の状況である」といったような解釈（帰属）を行っている場合もあった。さらには、こうした遅延を認識しており、親密な会話の場合には携帯電話の使用を避けるという人もいた。このような違いの一端が会話に対する意識の程度差だと考える。遅延を錯誤帰属している場合も、会話での間の取り方のようなものには敏感であり、ただ、それを携帯電話技術に帰属していないということになる。このように、単に会話に対する不安や回避といったネガティブな傾向ではなく、会話事態に対する意識の程度に関する個人差を測定する目的で尺度を構成する。

2000年度の授業では、「1対1の言語的コミュニケーションを行う際に気になること」という観点からステートメントを収集した。当初設定した条件は、1対1の会話であることと、それが対面または電話によるものという2つであった。216のステートメントを収集し、最終的に50項目のステートメントを作成し、既存の性格特性や傾向性を測定する6尺度（授業の都合上、6グループに分かれていたため）とあわせて調査を行った。男性36名、女性153名に対して実施した。因子分析の結果5因子を抽出した。第Ⅰ因子は、「話し相手のアクセントやイントネーションが気になる」、「話をしているとき、相手のしぐさに目がいつてしまう」、「話しているとき、相手との距離が気になる」などの12項目からなる“一般的関心”因子 ( $\alpha = 0.81$ )、第Ⅱ因子は、「相手と目を合わせて話す方が話しやすい（逆転）」、「会話中に視線が合うとつい目をそらしてしまう」、「向かい合って話すと、相手のどこ見て話してよいか分からない」などの6項目からなる“視線交錯”因子 ( $\alpha = 0.83$ )、第Ⅲ因子は、「話の間があいたとき、自分から話を切り出すことができる」、「会って話をしているときに、自分か

ら会話を切り上げることができる」などの4項目からなる“主導権”因子 ( $\alpha = 0.69$ )、第IV因子は、「親しい人と話すとき、沈黙が気になる」、「電話で親しい人と話すとき、沈黙が気になる」などの4項目からなる“沈黙”因子 ( $\alpha = 0.76$ )、第V因子は、「静かな電車やバスの中で周りを気にせずに話することができる (逆転)」、「自分の声の大きさが、相手に対して聞きやすい大きさがどうか気になる」などの5項目からなる“他者配慮”因子 ( $\alpha = 0.62$ ) であった。

各因子に含まれる項目数にばらつきが多く、信頼性がやや低いものもみられたが、因子間の相関関係をみると、いくつかの特徴が示された。たとえば、会話事態に対する一般的な関心が高い人は、会話中の沈黙を気にし、会話相手に配慮する傾向がある。また、会話の主導権をとる人は視線の交錯に対して不安にならず、会話相手に対する配慮もしない傾向がある、というものであった。これらは、日常的な感覚から納得のできるものであろう。注目したい点としては、コミュニケーション回避や不安で取り上げられることが多い「視線交錯」と「沈黙」が他の側面とどのような関連をもつかということである。第I因子が会話に対する意識の中核をなすものだとすると、この側面は、沈黙因子とは相関を示すが視線交錯とは無相関であるという結果であった。項目の内容をみると、視線交錯に関するものはどちらかというとなんか話にくさに関連するような内容であり、沈黙に関してはそれを気にする(会話を阻害する要因とまではいかない)ような内容となっている。したがって、この尺度で測定される会話に対する関心が、必ずしも不安などのネガティブな側面と関連するものでないということが示唆されよう。

また、こうした特性が実際のコミュニケーション場面でどのような知覚の傾向を示すかを、双方向通信装置(テレビ電話のようなもの)を用いて検討した。この装置は、会話者の映像と音声を双方向で送受できるものであり、音声を1ms単位で遅延させることができるものである。25ms単位で音声を遅延させ、その閾値を測定したところ約250~270msであった(鈴木, 2001)。しかしながら、それが会話意識尺度と関連するかどうかを検討したところ、有意な関係はみられなかった(水野, 2001)。さらに、会話に対する一般的な関心の高低を条件とし、面接場面における音声遅延の効果を見たところ、会話に対する印象(近藤, 2001)においても、対人印象(藍谷, 2001)においても有意な関連を示すことができなかった。しかしながら、これら一連の実験は、予備実験的な意味あいをもたせたものであり(たとえば、遅延の閾値などのデータを得るという点では意味があったと考える)、会話意識尺度の有用性を否定するものではないと考える。

また、小川(2001)は第I因子から第V因子までの31項目を用いた調査を行い、改めて主成分分析を行い、3成分を抽出している。第I主成分は“全般的ノンバーバルコミュニケーション(以下NVCと略記)に対する意識”(13項目、 $\alpha = 0.80$ )、第II主成分は“視線交錯意識”(6項目、 $\alpha = 0.81$ )、第III主成分は“沈黙・タイミング意識”(5項目、 $\alpha = 0.58$ )であった。この中の第I主成分について小川は、「NVCには視線や沈黙も含まれるが、それらはそれぞれ第II、第III主成分として独立した成分を構成したため、第I主成分にはその2つの

NVCは含まれていない。また、第I主成分の意識とは、気になる、注意が働くというものであり、項目内容からはコミュニケーション不安などといったネガティブな意味を含んでいるとはいえない」としている。2000年度の授業結果と比べると、会話の主導権と他者に対する配慮に関する項目が分散しているという結果であった。

以上のような経緯を踏まえて、会話意識尺度の再構成を行うことを目的とした。具体的には、これまでに得られた因子に基づき、新たにステートメントを収集し、関連するであろう既存の特性尺度と同時に実施することで、新尺度の特徴を明らかにすることである。

## II. 方法

### 1. ステートメントの収集

昨年度作成した会話意識尺度(5因子31項目)を受講生に提示し、新たに関連するであろうステートメントを収集した。基本的には、昨年度の5因子にこだわらずに作成したが、結果として昨年度の5因子の側面を反映したものになった。101のステートメントから、最終的に52項目の尺度を作成した。これらの項目には、昨年度使用したものがそのまま使用されているわけではなく、一部変更されている。これらについて「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5段階でたずねた。

### 2. 質問紙の構成

本調査は授業として行っているため、6グループがそれぞれ会話意識と関連するであろう既存の尺度を取り上げた。それは、次の6尺度である。

- ①自意識尺度：菅原(1984)によって作成された、Fenigstein, Scheier, & Buss(1975)の尺度に基づいた公的自意識と私的自意識に関する21項目からなる尺度。公的自意識とは、自己の服装や髪型、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差であり、私的自意識とは、自己の内面に注意を向ける程度に関する個人差を示すものである。
- ②特性シャイネス尺度：相川(1991)による16項目からなる尺度。特性シャイネスとは、特定の情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群である。
- ③社会的スキル尺度：菊池(1988)のKiSS-18と呼ばれる18項目からなる尺度。この尺度は、社会的スキルの中でも会話と関連した項目から構成されていると考えられる。
- ④親和動機尺度：岡島(1989)による26項目からなる尺度。この尺度はHill(1987)に基づいて作成されたものであり、“情緒的支持”、“ポジティブな刺激”、“社会的比較”、“注意”の4因子で構成されている。
- ⑤セルフ・モニタリング尺度：石原・水野(1992)によるLennox & Wolfe(1984)の邦訳版13項目である。セルフ・モニタリングとは、対人場面において状況や他者の行動を観察し、自己表出や自己呈示が社会的に適切かどうかを考慮して自分の行動を統制する傾向で

あり、Snyder (1974) がその尺度を作成したが、その改訂版である。この尺度は、“他者の表出行動への感受性”と“自己呈示の修正能力”の2因子で構成されている。

- ⑥コミュニケーション不安尺度：McCroskey (1982) を訳した西田 (1986) の24項目からなる尺度。“グループにおける側面”、“ミーティングや会議における側面”、“2人の相互作用における側面”、“公的な場でのスピーチに関する側面”の4側面を取り上げている。

全体の項目数が非常に多いので、調査用紙は2種類作成した。3つの既存の特性尺度、会話意識尺度52項目、残りの既存の特性尺度、という配列のものと、会話意識尺度の前後の既存の特性尺度を入れ替えたものの2種類である。また、最後に、出身地、住居形態、サークルやアルバイトの経験、携帯電話の使用状況、携帯電話での音声遅延の認知などについてたずねた。

### 3. 被験者および実施時期

大学1、2年の男女320名を対象にして、心理学関係の講義時間中に集団で実施した。調査時期は2001年6月。著しく回答が不備なものを除いた、男性66名、女性250名、計316名を分析の対象とした。

## III. 結果と考察

### 1. 関連特性尺度の全体的傾向

会話意識と関連するであろう特性を測定する既存の尺度として、6つの尺度を実施した。しかしながら、親和欲求尺度の因子分析の結果は岡島 (1989) のものと、コミュニケーション不安尺度の因子分析の結果は西田 (1986) の定義と微妙に異なっており、より詳細な検討が必要であると判断した。また、社会的スキル尺度は1因子性が確認され、 $\alpha$ 係数も0.85と高い値を示したが、特性シャイネスとの相関が $-.576$  ( $p < .001$ ) と比較的高い負の値を示したので、ここでは自意識、特性シャイネス、セルフ・モニタリングの3尺度についてのみの結果を示すことにする。

#### 1) 自意識尺度の分析結果

因子分析の結果、菅原 (1984) では公的自意識に含まれていた「世間体など気にならない(逆転)」という項目が、公的自意識と私的自意識の両因子に対して低い負荷を示したので、分析から除外した。したがって、公的自意識は10項目からなる尺度 ( $M = 53.48$ ,  $SD = 9.92$ ,  $\alpha = 0.88$ )、私的自意識は10項目からなる尺度 ( $M = 52.05$ ,  $SD = 9.63$ ,  $\alpha = 0.84$ ) の2尺度として扱った。

#### 2) 特性シャイネス尺度の分析結果

相川 (1991) と同様の分析を行い、1因子性を確認した。16項目すべてを用いた尺度 ( $M = 48.77$ ,  $SD = 11.72$ ,  $\alpha = 0.91$ ) を用いた。

## 3) セルフ・モニタリング尺度

因子分析の結果、石原・水野 (1992) では、“自己呈示の修正能力” 因子に含まれていた「自分の描くイメージが相手に伝わっていないと感じているとき、それを役立つようなイメージにたやすく変えることができる」という項目が、2つの因子に対してある程度高い負荷を示したので、分析から除外した。したがって、“他者の表出行動への感受性 (以下「感受性」と略記)” は6項目からなる尺度 ( $M=22.68$ ,  $SD=5.24$ ,  $\alpha=0.83$ )、 “自己呈示の修正能力 (以下「修正能力」と略記)” は6項目からなる尺度 ( $M=22.21$ ,  $SD=4.72$ ,  $\alpha=0.75$ ) の2尺度として扱った。

## 4) 尺度間の関連性

関連特性尺度の相関係数を求めたものがTable 1である。自意識の2つの下位尺度は菅原 (1984) に比べるとやや高い正の相関を示した。他者が観察しうる自己の側面に注意を向けがちな人ほどシャイであり、他者の表出行動への感受性が高いという結果であった。また、自己の内面に注意を向ける傾向が高い人ほど、他者の表出行動への感受性が高く、自己呈示の修正能力も高い傾向にあった。セルフ・モニタリングの2つの下位尺度は石原・水野 (1992) 同様、比較的高い正の相関を示した。セルフ・モニタリング傾向の高い人はシャイではないという傾向が示されている。

Table 1 関連特性尺度間の相関関係

	公的自意識	私的自意識	特性シャイネス	感受性
私的自意識	.233**			
特性シャイネス	.164**	-.031		
感受性	.153**	.307***	-.207***	
修正能力	.067	.182**	-.315***	.404***

\*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$ 

## 2. 会話意識尺度の分析

会話意識尺度52項目について主因子法、バリマックス回転で因子分析を行った (Table 2)。固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から5因子を抽出した。第Ⅰ因子は、「話し相手のアクセントやイントネーションが気になる」、「話をするとき、相手の方言が気になる」、「話をしている相手の口癖が気になる」といった7項目が高い負荷を示し、“表面的関心” 因子と解釈した ( $M=20.45$ ,  $SD=5.06$ ,  $\alpha=0.76$ )。第Ⅱ因子は、「話している相手が何を考えているか気になる」、「話をしているとき、相手がどのような気持ちでいるか気になる」、「電話で話をしているとき、相手が何を考えているのか気になる」といった8項目が高い負荷を示し、“内面的関心” 因子と解釈した ( $M=29.58$ ,  $SD=5.29$ ,  $\alpha=0.80$ )。第Ⅲ因子に高い負

Table 2 会話意識尺度の因子分析結果

会話意識尺度項目	平均値	標準偏差	I	II	III	IV	V	共通性
1 話し相手のアクセントやイントネーションが気になる	3.00	1.17	0.66	-0.06	0.01	0.01	-0.17	0.46
2 会話中の相手の姿勢や態度が気になる	3.51	1.06	0.48	0.28	-0.06	0.05	0.10	0.32
6 話をしているとき、相手のしぐさに目がいってしまう	3.41	1.05	0.46	0.06	-0.08	0.19	0.19	0.29
7 話をしているとき、相手の声の大きさが気になる	2.75	1.11	0.52	0.12	0.05	0.11	0.06	0.30
11 話をすると、相手の方言が気になる	2.59	1.27	0.62	-0.04	-0.03	0.04	-0.19	0.43
25 話をしているとき、相手の話す速さが気になる	2.44	1.01	0.53	0.19	0.10	0.11	0.03	0.34
34 話している相手の口癖が気になる	2.73	1.12	0.59	0.11	0.08	0.00	-0.12	0.39
18 電話で話をしているとき、相手が何を考えているのか気になる	3.27	1.18	0.32	0.57	-0.15	0.20	0.13	0.50
19 苦手な相手と話すときは、いつもより気をつかう	4.04	0.92	0.01	0.39	0.04	0.24	-0.05	0.22
20 自分の話す内容が相手に正確に伝わっているかどうか気になる	3.84	0.92	0.27	0.54	0.04	0.11	-0.03	0.38
21 自分ばかりが話をしていないか注意している	3.23	1.12	0.13	0.43	0.01	-0.11	0.16	0.24
24 話をしている相手が何を考えているのか気になる	3.60	1.10	0.31	0.62	-0.07	0.21	0.23	0.58
26 話をしているとき、相手の表情が気になる	3.81	0.95	0.34	0.44	-0.03	0.20	0.15	0.37
29 電話をかけるとき、相手の都合に配慮する	4.00	0.96	0.02	0.46	-0.10	0.03	0.05	0.23
31 話をしているとき、相手がどのような気持ちでいるか気になる	3.76	0.99	0.31	0.58	-0.07	0.26	0.21	0.54
8 向かい合って話す時、相手のどこを見て話してよいかわからない	2.81	1.27	0.16	0.06	0.78	0.13	-0.08	0.67
13 相手と向かい合っているほうが話しやすい	3.03	1.08	0.04	0.05	-0.47	-0.09	0.04	0.23
27 会話中に視線が合うとつい目をそらしてしまう	2.69	1.16	0.06	0.01	0.75	0.00	-0.14	0.59
35 親しくない相手と、互いに目を見て話をすることができる	2.90	1.18	0.00	0.02	-0.54	-0.06	0.18	0.33
41 相手と目を合わせて話すほうが話しやすい	3.06	1.08	0.08	0.14	-0.70	-0.07	0.04	0.53
48 相手が話しているとき、じっと見つめられると話づらい	3.19	1.26	0.03	-0.02	0.79	0.12	-0.16	0.66
5 会話がとぎれることに耐えることができない	3.00	1.22	0.04	-0.06	0.08	0.57	0.01	0.33
10 電話で親しい人と話すとき、沈黙が気になる	2.93	1.37	0.16	-0.01	0.02	0.65	-0.15	0.47
22 電車やバスの中で、偶然知り合いと会ったとき沈黙が気になる	3.50	1.10	0.21	0.15	0.29	0.44	-0.12	0.36
30 話し相手の間が気になる	2.94	1.12	0.31	0.26	0.11	0.50	0.02	0.42
37 親しい人と話すとき、沈黙が気になる	2.64	1.29	-0.04	0.08	0.10	0.69	-0.18	0.52
52 初対面の人と話すとき、沈黙が気になる	3.65	1.12	0.15	0.11	0.25	0.39	-0.09	0.26
4 話しの間があいたとき、自分から話を切り出すことができる	3.51	0.95	0.08	-0.04	-0.14	0.10	0.63	0.44
9 初対面の人に対してでも、すぐにうちとけて話しをすることができる	2.80	1.13	-0.03	-0.15	-0.26	0.06	0.52	0.36
15 興味が無い話しの内容でも、相手に会わせることができる	3.51	1.02	-0.04	0.17	0.02	-0.01	0.43	0.21
23 会話のテンポを相手に会わせることができる	3.27	0.97	-0.09	0.14	-0.05	-0.09	0.39	0.19
36 会って話をしているときに、自分から会話を切り上げることができる	3.09	1.06	0.02	-0.14	-0.13	-0.10	0.43	0.23
3 相手が異性だと、話し方が変わる	2.91	1.07	0.13	0.09	0.19	0.18	-0.10	0.10
12 話をしているとき、相手のあいづちがないと気になる	3.50	1.16	0.33	0.15	0.08	0.15	-0.01	0.16
14 人の話をさえぎることができない	2.88	1.12	-0.03	0.24	-0.03	0.10	-0.30	0.16
16 初対面の人と話すとき、お互いの距離が気になる	2.81	1.07	0.25	0.15	0.16	0.08	0.07	0.12
17 話している相手がどこを見ているか気になる	3.17	1.16	0.38	0.31	0.08	0.20	0.19	0.32
28 自分の声の大きさが、相手に対して聞きやすい大きさかどうか気になる	2.77	1.17	0.37	0.36	-0.06	-0.03	-0.08	0.28
32 親しい人と話すとき、相手との距離が気になる	2.50	1.12	0.29	0.26	0.17	0.35	0.10	0.31
33 電話をかけるとき、周囲が静かな方が話しやすい	3.86	1.14	0.05	0.30	0.02	-0.02	-0.03	0.09
38 話をすると、まわりがうるさいと話づらい	3.50	1.19	0.20	0.36	0.02	-0.10	-0.08	0.18
39 話をしているとき、自分の口癖が気になる	2.76	1.12	0.33	0.36	0.01	0.06	-0.16	0.27
40 電話で話しているとき、近くに人がいると話づらい	4.10	0.92	0.09	0.30	0.07	0.06	-0.18	0.14
42 電話中に相手と話出すタイミングが重なったときはゆずる	3.72	0.89	-0.11	0.29	-0.03	0.04	-0.03	0.10
43 話の内容が理解できないと不安になる	3.34	1.10	0.18	0.36	0.05	0.18	-0.04	0.20
44 会話をしているときでも、つい他の人たちの話を聞いてしまうことがある	3.49	1.07	0.16	0.14	0.01	0.19	-0.04	0.08
45 相手が電話の向こうで何をしているのか気になる	2.79	1.24	0.39	0.39	0.00	0.21	0.30	0.44
46 相手の言っていることとと思っていることの違いが気になる	3.53	1.10	0.39	0.37	-0.07	0.24	0.17	0.38
47 相手の年齢によって、話し方を変えることが苦手だ	2.39	1.15	0.06	-0.04	0.09	0.08	-0.18	0.05
49 静かな電車やバスの中でまわりを気にせず話をすることができる	2.30	1.02	0.00	-0.25	-0.07	0.12	0.14	0.10
50 電話を切りたくても、話をうまく切り上げることができない	3.12	1.19	-0.05	0.20	0.12	0.21	-0.36	0.23
51 遠まわしな表現をされるとイライラする	3.34	1.12	0.10	0.04	-0.02	-0.05	0.13	0.03
2 乗和			4.00	3.91	3.32	2.71	2.19	16.13
寄与率			7.85	7.66	6.50	5.31	4.30	31.62

荷を示した項目は、「自分が話しているとき、じっと見つめられると話しづらい」、「向かい合って話すと、相手のどこを見て話してよいか分からない」、「会話中に視線が合うとつい目をそらしてしまう」などの6項目であり、“視線不安”の因子と解釈した ( $M=17.69$ ,  $SD=5.27$ ,  $\alpha=0.84$ )。第IV因子は、「親しい人と話すとき、沈黙が気になる」、「電話で親しい人と話すとき、沈黙が気になる」、「会話がとぎれることにことに耐えることができない」などの6項目が高い負荷を示し、“沈黙懸念”因子と解釈した ( $M=18.68$ ,  $SD=4.85$ ,  $\alpha=0.76$ )。最後の第V因子に高い負荷を示した項目は、「話の間があいたとき、自分から話を切り出すことができる」、「初対面の人に対してでも、すぐにうちとけて話をするができる」、「興味がない話の内容でも、相手に合わせるができる」といった5項目であり、“会話スキル”因子と解釈した ( $M=16.24$ ,  $SD=3.27$ ,  $\alpha=0.63$ )。第IV因子と第V因子は、やや $\alpha$ 係数が低いが、他の因子はある程度の信頼性が確認された。

因子名は、昨年度のものを参考にしたが、第II因子は他者に対する配慮というよりも、第I因子との対応を考え、第I因子を“表面的関心”、第II因子を会話相手に対する“内面的関心”とした。また、視線に関する項目は単に視線交錯に関する内容というよりも、不安傾向を示している内容があると判断したため“視線不安”とした。しかし、第IV因子の沈黙に関しては、視線に関する不安に比べるとその傾向は少ないと判断し、“懸念”という表現を用いることにした。第V因子に関しては、後にその対応について述べるが、昨年度の会話事態における主導権という以上にスキルの側面が含まれていたため、“会話スキル”に関わる因子と判断した。

各因子ごとに項目得点を単純加算し尺度得点を算出した。会話意識尺度の下位尺度の相関関係をTable 3に示した。表面的関心が高い人は内面的な関心も高く、沈黙に対しても気にかける傾向がある。しかしながら、表面的関心と内面的関心は視線不安や会話スキルとは無相関である。これは、ここでの「関心」が、気になるということや注意を向けるということと関連し、必ずしもこれまでの不安といったネガティブな側面と関連していないということを示している。視線不安は沈黙懸念との正の関連を示しているが、これはある程度想定できる関係である。また、会話スキルは視線不安と負の相関を示していた。

Table 3 会話意識尺度の下位尺度間の相関関係

	表面的関心	内面的関心	視線不安	沈黙懸念
内面的関心	.411***			
視線不安	.068	-.065		
沈黙懸念	.292***	.293***	.278***	
会話スキル	-.028	.096	-.287***	-.110

\*\*\* $p<.001$



Table 4 会話意識尺度の関連特性との相関関係

	表面的関心	内面的関心	視線不安	沈黙懸念	会話スキル
公的自意識	.371***	.510***	.176**	.482***	-.036
私的自意識	.234***	.364***	-.091	-.005	.131*
特性シャイネス	.098	.052	.397***	.205***	-.604***
感受性	.182**	.270***	-.136*	-.023	.377***
修正能力	.028	.128*	-.195**	-.173**	.427***

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

### 3. 会話意識と関連特性との関係

会話意識の5つの下位尺度と関連特性尺度との相関関係を示したものがTable 4である。表面的関心と内面的関心の2つは、類似した相関のパターンを示している。公的自意識、私的自意識と中程度の正の相関を示し、セルフ・モニタリングの他者の表出行動への感受性と弱い正の相関を示している。内面的関心というのは、会話の相手の内面に対する関心をもつ程度であるので、他者から見られる対象としての自己に注目する公的自意識と高い相関を示しているのは、ともに他者に対する関心の現れと考えることもできる。同様に、内面的関心と感受性の相関もやや高い。この2つの関心の側面が、特性シャイネスと無相関という点は、今回の会話意識がネガティブな側面のみ焦点をあてていないことを示していると考えられる。

会話意識の中で、もっともネガティブな側面として捉えられている視線不安は、逆に特性シャイネスと高い相関を示している。また、沈黙懸念は視線不安ほどネガティブな方向をもっていないと考えられるので、公的自意識との相関が視線不安との値より高く、特性シャイネスとの値では低くなっていると考えられる。会話スキルの因子が特性シャイネスとセルフ・モニタリングと比較的強い関連性を示しているのは、他者に対する行動的側面と関連しているからだと考えられる。会話意識尺度として考えた場合に、第V因子の会話事態における会話スキルに関する項目は除いて考えた方が妥当かもしれない。

本尺度の作成のきっかけとなった携帯電話の音声遅延に関するデータとの関連をみってみる。携帯電話の音声が遅延していることについて「知らない」と答えた人は150名(47.5%)、「知っているが気づかない」人が42名(13.3%)、「気づいているが気にならない」人が96名(30.4%)、「気になっている」人が24名(7.6%)であった。人数にばらつきがあるが、参考までに、これらの人たちの会話意識尺度得点を比較したものが、Table 5である。表面的関心と視線不安において10%水準の傾向がみられた(それぞれ、 $F(3,308)=2.232$ 、 $F(3,310)=2.186$ )。また、沈黙懸念については1%で有意であった( $F(3,309)=4.120$ )。いずれも、「気になる」と答えた人の方が得点が高くなっていた。

Table 5 会話意識尺度の関連特性の相関関係

	表面的関心†	内面的関心	視線不安†	沈黙懸念**	会話スキル
知らない	19.9 (4.92)	28.9 (5.27)	18.2 (5.24)	19.3 (4.73)	16.1 (3.22)
気づかない	20.3 (5.48)	30.3 (3.90)	17.2 (5.44)	17.3 (4.61)	15.9 (3.11)
気にならない	20.9 (4.96)	30.0 (5.33)	16.7 (5.32)	17.8 (4.90)	16.4 (3.15)
気になる	22.4 (5.32)	30.5 (5.73)	19.1 (4.58)	20.4 (4.93)	17.3 (4.23)

† p&lt;.1 \*\*p&lt;.01

#### 4. 会話意識尺度の再構成と今後の課題

最後に、確認のために行った調査の概要について記す。Table 2 に示したように、複数の項目に高い負荷を示した項目もいくつかみられた。そこで、比較的負荷の高い項目35項目を用いて、再度調査を行った。調査項目は、齋藤・中村 (1987) の対人的志向性と吉田他 (2000) の社会考慮と新たに付け加えた項目を含む35項目を前半に、後半に会話意識尺度35項目を連続して並べた。男性30名、女性127名の合計157名を分析対象とした。会話意識尺度項目の因子分析の結果5因子を抽出したが、会話スキルに関しては4項目だけとなった。内容的にみても、また、先の尺度間の関連性や、携帯電話の音声遅延に関する分析においても、会話スキルは意識というよりも、むしろスキルそのものであると考えられる。したがって、最終的にはこの会話状況におけるスキルに関する項目を除いた項目で会話意識尺度を構成すべきだと考えている。

この結果については、別の機会に報告するが、この確認的調査で採用された項目は、Table 2 の項目番号にアンダーラインをつけたものである。項目17が第Ⅱ因子として復活している。現時点での最終的尺度として、第Ⅰ因子=表面的関心 (1、2、7、11、25、34) 6項目で  $\alpha = 0.84$ 、第Ⅱ因子=内面的関心 (18、17、20、24、26、31) 6項目で  $\alpha = 0.83$ 、第Ⅲ因子=視線不安 (8、13、27、35、41、48) 6項目で  $\alpha = 0.86$ 、第Ⅳ因子=沈黙懸念 (5、10、22、37、52) 5項目で  $\alpha = 0.77$  からなる尺度を構成した。この調査結果に基づき、会話事態での実験的検討を行う予定である。特に、表面的関心と内面的関心は一般的な会話に対する意識・関心と考えられるが、視線と沈黙に関する側面はある程度状況との関わりで検討する必要があると考えられる。不安や懸念という表現を用いたように特定の傾向を示す可能性をもった項目で構成されている点も再検討する必要があるであろう。

今回の分析では、回答者の個人属性(たとえば、性別や携帯電話の利用状況など)との関連での分析が行われていない点や、他の尺度との関連性についても不十分なままである。今後、さらに分析検討を進めると同時に、実際の会話行動との関連性や、会話状況の認知の特徴などについて検討していく必要がある。

引用文献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, **62**, 149-155.
- 藍谷恭子 2001 面接場面における音声遅延の効果－対人印象と個人特性との関連－ 愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科卒業論文抄録集, **7**, 115.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Hill, C. A. 1987 Affiliation motivation: People who need people... But in different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008-1018.
- 石原俊一・水野邦夫 1992 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, **63**, 47-50.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 近藤靖江 2001 面接場面における音声遅延の効果－会話の印象と個人特性との関連－ 愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科卒業論文抄録集, **7**, 116.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. 1984 Revision of self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- McCroskey, J. C. 1982 *An Introduction to Rhetorical Communication*. (4th ed.) Prentice-Hall.
- 水野節 2001 映像と音声のズレについての閾値と個人特性の関連 愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科卒業論文抄録集, **7**, 118.
- 西田司 1986 コミュニケーション不安の測定 日本大学国際関係学部研究年報, **8**, 109-117.
- 小川一美 2001 大学生・短大生の職業観に関する研究－社会的スキルおよび会話に対する意識との関連から－ 名古屋短期大学研究紀要, **39**, 93-108.
- 岡島京子 1989 保育者をめざす学生の親和動機の構造と保育者志向性との関係について 東京学芸大学紀要 (1 部門), **40**, 159-163.
- 斎藤和志 1991 実験ゲーム場面における対人的志向性の効果－詮索的選択を設けた囚人のジレンマ・ゲームを用いて－ 実験社会心理学研究, **31**, 121-131.
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集 (文学部篇), **24**, 67-77.
- 斎藤和志・中村雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **34**, 97-109.
- 坂本正裕・チャールズ プリブル・ジェームズ キートン 1998 コミュニケーション回避研究の歴史と現状 心理学研究, **68**, 491-507.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Snyder, M. 1974 The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- 鈴木裕子 2001 映像と音声のズレについての閾値測定 愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科卒業論文抄録集, **7**, 117.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 53-73.